

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ 169

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きししたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

全身性強皮症では頸椎の石灰化が多い

第466回日本皮膚科学会大阪地方会から(平成30年3月10日)

全身性強皮症患者159人における傍脊椎石灰化の有無をCTで検索した結果の報告。27人(17%)で傍脊椎石灰化がみられた。頸椎部がもっとも多く21人(78%)で、脊髄を圧迫する病変は7例(4%)にみられた。全身性強皮症は長期のフォローが必要だが、手のしびれ感や上肢の運動障害が出現した場合は精査が必要である。傍脊椎石灰化を合併した強皮症患者は男性が多く、手指潰瘍と手指末節骨短縮が有意に多いという特徴がみられた。石灰化の発症には血管障害が関連している可能性がある。

「石灰化に対する治療法はいまのところないとのこと。抗セントロメア抗体陽性のlimited typeでみられる皮下石灰化は、高血圧症でCa拮抗薬を内服している症例に少ないとのこと、Ca拮抗薬の有効性が期待されている」。

DOCK8変異による高IgE血症

第3回小児アトピー性皮膚炎コンセンサスフォーラムから(平成30年3月18日)

dedicator of cytokinesis 8 蛋白をコードする遺伝子(DOCK8)の変異は高IgE血症を伴う副鼻腔・肺・皮膚のウイルス反復感染をきたす複合免疫不全症の重型であるが、同

時に重篤なアトピー性皮膚炎を発症することが知られている。DOCK8のノックアウトマウスも同様に重症の皮膚炎を発症し、IL-31の産生が著しく亢進する。そのメカニズムを解析したところ、DOCK8の下流で転写因子としてEPAS1が作動し、IL-31産生を誘導していた。EPAS1に対する抗体製剤がアトピー性皮膚炎の痒みに対する創薬標的になると思われる。

「抗IL-31抗体製剤は実用化に向けて準備中とのことだが、これ以上の有効性があるかどうかはやってみないとわからない。生化学的な「痒み」の概念がよくわからないが、搔破行動の抑制につながれば、外用治療と組み合わせることによって悪化予防になるのかもしれない」。

Helicobacter cinaediによる再発性の蜂窩織炎

第34回日本臨床皮膚科医会総会から(平成30年4月26日)

Helicobacter cinaedi (*H. cinaedi*) は1984年にホモセクシュアル男性らの直腸から分離培養された菌で、通常はAIDSなどの重症免疫不全患者に敗血症を伴う再発性の蜂窩織炎をきたすことが知られている。血液培養では6～10日後によく出てくるので、早期に破棄しないことが肝要。*H. cinaedi* 主要抗原タンパク質は*H. pylori*の抗原タンパク質と相同性を有し、免疫的にも交差反応を示す。感染部位が胃粘膜に限局している*H.*

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

*pylori*に比べ、本菌は血管侵襲性が強く、菌血症を介して全身に感染が及ぶ可能性があり、さまざまな疾患の病態にかかわっている可能性がある。

「最近では血清による診断が可能となっている。心房性不整脈や解離性大動脈瘤などの血管系の疾患との関連が指摘されている。高齢者で下肢にむくみがあり、蜂窩織炎を生じて改善に時間を要する症例がある。静脈性の循環障害だと思っていたが、*H. cinaidi*の関与があるのかもしれない」。

不明熱とランダム皮膚生検

第34回日本臨床皮膚科医会総会から(平成30年4月26日)

持続する不明熱の原因として、血管内大細胞型B細胞性リンパ腫(intravascular large B cell lymphoma: IVLBCL)を考える必要がある。IVLBCLは節外臓器の微小血管内を閉塞性に進展する悪性リンパ腫で、全身臓器に虚血性病変をひきおこすが、なんらかの神経症状を呈することが多い。ランダム皮膚生検が診断に不可欠で、可及的速やかに行う必要がある。通常は上腕、大腿、腹部などからやや大きめの皮膚を脂肪組織まで採取し、病理検体とするとよい。

「これまでに触った経験がないのでわからないが、病理組織をみるとかなり多くの細胞集塊があるので、触診でわかるような気がする。実際に経験した皮膚科医に聞いてみたいと思う」。

月経と関連する3疾患の鑑別

第34回日本臨床皮膚科医会総会から(平成30年4月26日)

40代後半の女性。全身にやや持続期間が長い膨疹様紅斑を生じて来院した。月経の開始1週間前から出現し、月経開始とともに消褪する。皮内テストを施行したところ、estrogenで陽性、progesteronは陰性で、estrogen dermatitisと診断した。DDSの内服で症状が軽快する。月経に関連する皮膚病変はestrogen dermatitisのほか、auto-progesteron dermatitis(皮内テストでestrogen陰性、progesteron陽性)、月経疹(皮内テストは両者とも陰性)があり、鑑別が可能である。

「そんなにシンプルだったか、という印象。周期的に遠心性だったり環状だったりの変な膨疹様紅斑が生じる女性患者を経験したことがあるが、月経との関連を聞いておけばよかったと思った」。

